

## 金の糸の合併症

### ①アレルギー

山下理絵 YAMASHITA Rie

湘南鎌倉総合病院形成外科・美容外科部長

#### はじめに

肌のアンチエイジングとして行われている「金の糸」。施術を行っているクリニックでは時間とともに「金の糸」はなくなる、取りたいときには簡単に取れる、金だからアレルギーは起こらない、と説明されている。

本当にそうだろうか？

金の糸(Golden Thread Lift)の歴史は古く、1969年にフランス人医師Cauxにより報告されている。彼は、縦横各2本の横断線を、頬の顔表面上で互いに交差させる金の糸による若返り美容術を開発した。1980年代後半までは金に対するパッチテストがあまり行われていなかったことや、金が不活性物質であるという認識から、金に対するアレルギーはまれであると考えられていた。現在の方法は、2000年にスペイン人医師Andres Franco Velascoが、24金でできた6-0の糸と4-0ポリグリコール酸吸収糸を皮膚表面と平行になるように真皮に埋入する方法である。

#### 1 金のアレルギーはなぜ起こるか？

Sabroeは1996年に、塩化金は潜在的に強い感作物質で、金は塩素処理された水やアルカリシアン化溶液に溶

け、とくにチオールを含むアミノ酸溶液にも溶けることから、皮膚と接する金は溶解して皮膚から吸収される可能性があり、その結果、感作されてアレルギー性皮膚炎も引き起こし得るし、金はこれまでに考えられているよりも接触皮膚炎の原因となり得ると報告している<sup>1)</sup>。

2007年、Conde-Taboadaは、おそらく金は汗に含まれるアミノ酸の作用により可溶性に変化し、皮膚に吸収された結果、接触皮膚炎を引き起こしていると報告した<sup>2)</sup>。

#### 2 実際の金のアレルギーの頻度は

Eislerの報告では、近年における金のパッチテスト陽性率はアジアで8.6%、ヨーロッパで10%、北アメリカで9.5%と高率であり、考察のなかで皮膚に直に接する貴金属の金はやはり汗で徐々に溶解していくと述べている<sup>3)</sup>。その結果、金に対する感作、アレルギー反応を生じると考えると非常に高い陽性率である。日本では、1987年と古い報告になるが、東京都済生会中央病院で1.8%とされており、この報告から日本人にも金のアレルギーが生じていることがわかる(図1)<sup>4)</sup>。